

Diseases in the Tudor Interludes

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-07-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 米村, 泰明 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/291

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



チューダー朝インターロードにおける病

Diseases in the Tudor Interludes

米村 泰明

YONEMURA, Yasuaki

はじめに

英国チューダー朝の演劇形態のひとつであるインターロードは、それ以前の道徳劇の特徴である、アレゴリカルな悪徳と美徳の登場人物が、人間一般を寓意化した主人公の魂を奪い合ういわゆるプシュコマキアの伝統を継承しつつ、その視野を宗教的教訓からより広い社会の有様へと広げていった。寓意化された人間は「人類」や「万人」という名を与えられ、人間誰もが持つ普遍的な性質、特にその「弱さ」を体現して舞台上に現れた。その「弱さ」はジャンルの性質上、キリスト教が求めるあるべき生き方から逸脱しがちな特性として描かれている。煎じ詰めれば「七つの大罪」に該当するものである。従って人間を墮落させ神の道から踏み外させようとする悪徳と罪を具現化する名称を与えられ、人間を守ろうとする美徳はこれに対抗する名前を持っていた。

インターロードが問題意識をキリスト教的教訓のみならず社会的問題に広げていく中で、主人公は普遍的な人間から作者の問題意識をより特定化する名前を与えられるようになる。そして興味深いことに、アレゴリーであるはずの登場人物の肉体性を表現する描写が増え

てくることになる。アレゴリカルな登場人物によって演じられる舞台の上で、病という極めて肉体的な現象が多く言及されることは興味深いことである。本稿の筆者は、過去にも『三階級の風刺劇』および『王威』という二つの寓意的な国王の肉体が経験する苦しみや悲しみなどを考察した¹⁾。本稿では、考察の範囲を広げ、「病」という現象を演劇作品がどのように利用しているのかを考察する。

ルクレティウスからミルトンまで

病はなぜ発症し、どのように感染していくのか。M. Healy は紀元前のギリシアの哲学者ルクレティウス (Lucretius, 96-55BC) と17世紀の詩人ジョン・ミルトン (John Milton, 1608-74) の二人の著作の一節を引いて、1700年以上に及ぶ病の原因観の変遷を例示している。より正確に言えば、原因観は医学の発達と歩調をそろえてはいない、ということを明らかにしている。ルクレティウスはその著作の中でいわゆる「マイアズマ説」(腐敗物質などから発する瘴気が大気中を漂って病を引き起こすという説)を信奉し、病に関する宗教的解釈を虚偽として排斥している。一方でミルトンはこの世の悲惨な出来事を神の怒りとして受け止めているのである²⁾。

キーワード：ジョン・スケルトン、ジョン・ベイル、病、カトリック、プロテスタント
Key words : John Skelton, John Bale, disease, catholic, protestant

病の原因を人間の罪に対する神の怒りとする考え方は、特に黒死病 (black death)³⁾ や癩病 (leprosy)、梅毒 (syphilis) などの疫病に関してキリスト教会によって喧伝されていた。疫病から身を守り、あるいは罹患したときの特効薬は、医者によって処方された薬品ではなく、心から自分の罪を後悔し、涙を流しながら祈り、神の許しを得ることであった⁴⁾。旧約聖書の『詩編』91がその根拠となっている。「…暗黒の中を行く疫病も/真昼に襲う病魔も/あなたの傍らに一千の人/あなたの右に一万の人が倒れるときすら/あなたを襲うことはない。あなたの目が、それを眺めるのみ。/神に逆らう者の受ける報いを見ているのみ。/あなたは主を避けどころとし/いと高き神を宿るところとした。/あなたには災難もふりかかることがなく/天幕には疫病も触れることがない。」(91:6-10)⁵⁾

癩病は本来は感染性の非常に弱い疾病であるが、罹患者の容姿をグロテスクに変貌させてしまうことが、魂の汚れを外面に表す病とされた。聖書において癩病への言及は数多い。『レビ記』はその代表であろう。しかし、必ずしも『レビ記』に登場する皮膚病の症状が癩病をさしているとは限らない。旧約には癩病が罪の報いであるというエピソードが数多く載せられており、その対象となる罪は「傲慢」「嫉妬」「憤怒」「食欲」であるとB.L.Grigsbyは述べている⁶⁾。

梅毒はセックスとの連想がきわめて強い病であり、「恐ろしさにおいて癩病やペストを凌ぐ」と言われるものの、罹患者は恐怖や嫌悪の対象としてではなく「みんなが冷笑を浴びせている恥ずべき病気」の持ち主であるとの捉えられ方が演劇作品においても見られる⁷⁾。

黒死病の正体と死者の数、梅毒がどのよう

な経緯でヨーロッパに持ち込まれたのかなどの歴史的事実は本稿が扱うものではない。感染の広がりや致死性の高さによってヨーロッパに大きな被害をもたらした黒死病、魂の汚れが皮膚に現れると考えられていた癩病、そして性的紊乱の結果として罹患する梅毒などの病を、イングランド演劇がどのように作品内に取り込んでいったのかを考えることにする。

病の原因

瘴気、天体の合、そして体液の過剰

中世ヨーロッパにおけるペストの治療法を記した書物で最も良く知られていたのは、14世紀のリエージュ（現在のベルギー）のジョン・オブ・バーガンディ（John of Burgundy）によるものとされている。この書物は1531年頃にトマス・モルトンという神学博士にしてドミニコ派の修道士によって英訳されてイングランドで読まれるようになった。いわばペストに関する基本的知識が紹介されているのである。この文書から、当時の人々のペストに関する考え方を読み取ってみよう⁸⁾。

第一章でペストの原因を述べている。まず第一に挙げられているのが、人々の間に蔓延している罪、特に地位の高い人々、教会や法曹界の高位の者たちの罪であるという。第二の理由として、土星と木星の合（地球から見て惑星が太陽と同じ方向にくること）によって引き起こされる汚れた空気と、そこから発生し人間の体液に強い影響を与える毒気がある。悪意のある天体の合は疫病のみならず、国の転覆から火災・水難、男女・親子関係に至まで災いをもたらすのである。人間の罪と天体の動きを強調するペストの原因は、その根拠を聖アウグスティヌス、聖ヒエロニモ、

聖グレゴリウス、そして聖アンブロシウスなどの教父たちや、医学の粗と言われるヒポクラテスに依っている。モルトンに欠落している原因は病原菌の存在であるが、これはやむを得ないであろう。中世のペストを始めとする疫病対策は、このような原因説を基にして行われていくのである。

モルトンから百年近く経った1625年に『疫病の感染の今この時、信頼できる規則、指示、あるいは広告』(*Certain Rules, Directions, or Advertisements for This Time of Pestilentiall Contagion*)と銘打った書物が出版されている⁹⁾。これは1603年のペスト襲来の際に出版されたものに貧しい人々向けの指示を加えて出版したものであり、出版者はフランシス・ヘリング(Francis Hering)という医学博士だった。彼は1518年にヘンリー八世の勅許を得て設立された医学者の団体であるCollege of Physiciansのフェローであった¹⁰⁾。

1603年はスコットランド王だったジェームズ一世がエリザベスの跡を継いで即位した年であり(在位1603年~1625年)、さらにその後を継いだのはチャールズ一世だった(在位1625年~1649年)。1625年には大規模なペストの襲来があったため、時宜にかなうべく出版されたのであろう。17世紀の初頭という段階で、医者がペストの原因についてどのように言っているのかを教えてくれる。

まずヘリングが指摘するのは、ペストの原因は神の怒りだということである。彼はその根拠として聖書を引用するが、それだけではなく、学問のある医者たちもどれに同意しているというのだ。したがって、特効薬は心からの改悛ということになる。彼は議員たちに、国王名で祈りと断食によって悔い改めるように命令してもらいたいと嘆願している。罪を

負う限り、神の手が及ぶとヘリングは言っている。17世紀に入っても神の怒りがペストの原因になると医者が大まじめに主張しているのである。感染拡大を防止するために糞尿の処理を適正に行うこと、排水路の清掃の必要性、遺体を適切に埋葬すること、動物の死体を放置しないこと、飽食と栄養失調を避けること、さらには感染者が使用した家具や寝具・衣服などの焼却処分など、理にかなった提言を行う一方で、旧来からの原因説からは完全には抜け出せていない。

繰り返し襲いかかるペストなどの疫病対策に何か進歩があったのだろうか。現場の医者は経験を積んでいたのではないか。だが神学者をかねる医者は懲りもせず、旧態依然たる思考の枠組みを変えようとはしなかった。むしろJohn Aberthが言うように黒死病の蔓延は、彼らの理論を強固にしかなかったのである。(Aberth 97) 病理的観察体験の積み重ねは、病に対する宗教的価値観を揺るがすことはなかったとも言えるだろう。宗教は「病」を、人々の生き方を自分たちの思想的枠組みに組み込むための、きわめて価値の高い武器と見なしていたのではないだろうか。この武器は劇作家も利用していたのである。

Healeyは16世紀のプロテスタントにとって、政治、宗教、経済、医学、倫理、そして文学に代表される芸術的表現は自らの信仰に分ち難く結びついてたと述べている。(Healey 65) キリスト教的倫理を教訓の形で視覚化した道徳劇においても、「病」は同様に機能していたと考えられる。その様相を国王のあるべき姿を描くジョン・スケルトンの『王威』、カトリック勢力によって命を落とすことになった国王の生涯を描く、聖職者出身のジョン・ペイルの『ジョン王』から読み込んでい

く。

スケルトンのMagnificence (1515年)

この作品¹¹⁾が掲げる教訓は Measure is treasure (125行)、すなわち「中庸が大事」であり、beware of 'had I wist' (211行)すなわち「後悔先に立たず」である。冒頭に登場する「幸福」(Felycyte)、「中庸」(Measure)そして「自由」(Liberty)の三人の寓意的人物の議論からそれが伺える。「中庸」の論旨によれば、中庸のない自由は動物同様の存在であり、中庸がいれば食べ過ぎるということはないという。(138-39行)

中庸を体液というコンテキストで考えれば、まさに安定した四体液の混合状態を表し、健康が保たれていることになる。四体液のどれかが過剰になることが病の原因のひとつであると考えれば、Magnificenceが「自由」を「中庸」の監視下においたことは、国を支配するものとして適切な判断だった。なぜならば、Magnificenceという寓意的人物が表すものは、国王の肉体のみならず、国家という身体だからである¹²⁾。

病への言及

「病」への言及がなされるのは悪徳どものやり取りからである。Magnificenceが「気まぐれ」(Fancy)を連れて退場するのが395行。「詐欺師」(Counterfet Countenance)が登場し、長々しい自己紹介を始める。そこへ「気まぐれ」が「法網やぶり」(Crafty Conveyance)を連れて再登場するのが493行。「中庸」がMagnificenceに重用されていることを語る「気まぐれ」の表現に病の比喩が見られる。彼に言わせれば「中庸」は人間の顔に広がる tetter (ヘルペスやタムシのような皮膚病)

のようなものである。憤る他の二人に対して「気まぐれ」は、mustard (芥子)を用いて事態を治療 (remedy) することが可能だと告げる。この場合の治療は、国王から「中庸」への信頼を失わせることを意味する。それを受けて「法網やぶり」が「それじゃあ、お前は tistic (気管支炎や肺炎、喘息などの症状の総称) が治せるのか、お前はそんなに医学に長じているのか」とからかう。芥子は薬種として盛んに用いられていた。同時に小柄な「気まぐれ」自身を芥子に例えているのである。(日本語の「山椒は小粒でもピリリと辛い」に該当する表現であろうか)「法網やぶり」の返答は、体液の偏りのせいで小柄な「気まぐれ」こそ治療が必要だろうという当てこすりである。(Nuess 101)

この三人に「舌先三寸」(Clockyd Colusyon)や「おためごかし」(Courtly Abusyon)らに加わって、「中庸」をMagnificenceから遠ざける悪巧みが始まるのである。その「治療法」が功を奏したというべきか、1375行で再登場したMagnificenceは「自由」に取り込まれて「中庸」を遠ざける。この後、自分の力を過信し、肉欲と物欲の道へと墮落していく。

「逆境」による処罰としての病

そうってしまったMagnificenceに襲いかかるのが「逆境」(Adversity)である。「逆境」の姿を見て、Magnificenceの肉体は震え上がり(1876行)、打ちのめされ持ち物と衣服のすべてを奪い取られる(1876SD)。「逆境」は自らを「神の一撃」(The stroke of God, 1883行)と称している。この表現は聖書にも用いられている。例えば、『エゼキエル書』24章16節、新共同訳では「人の子よ、わたしはあなたの目の喜びを、一撃をもってあなたか

ら取り去る」という箇所がそれにあたる。1611年に完成した欽定訳聖書では「一撃をもって」の原文は 'with a stroke' であるが、1382年のウィクリフ訳聖書では 'in plague (plague)' となっている。「神の一撃」は「神が人間を罰するためにもたらす疫病」という意味を含んでいるのである。1884行から始まる「逆境」がどのように悪しき人々を処罰する方法のカタログのうち、1903行から1908行では彼がもたらす「病」が紹介される。

I visit them sometime with blains and with sores; / With botches and carbuncles in care I them knit; / With the gout I make them to groan where they sit; / Some I make lepers and lazars full hoarse; / ...; / Some with the marmol to halt I them make; / And some to cry out of the bone-ache: ... (下線は筆者による)

下線部が病名あるいは症状を表す言葉である。blains は水ぶくれあるいは火ぶくれ、sore も皮膚の腫れを意味する。marmol は特に脚の腫れ物を言う。痛風 (gout) と骨の痛み (bone-ache) を除く病がすべて皮膚病に関わるものであることは注目すべきである。最も明確なのは癩病 (lepers and lazars) であろう。中世ヨーロッパにおいては、癩病は魂の汚れが身体の表面を腐敗させる病として扱われていた。また bone-ache は梅毒の症状の一つである。癩病と梅毒は、ペストとともに中世ヨーロッパを席卷し多数の死者を出した疫病である。疫病の発生が神から使わされた「逆境」による悪しき人々への一撃であるという文脈がこの数行には潜んでいるのである。1944行で「逆境」は観客に対して念を押す。「自分はさまざまな病をもって人々を訪れ、撃つ

だ」(I visit them and strike them with many sore plagues.) ここで使われている plagues はペストを限定するのではなく、人間に致命的な損傷を与える各種の疾病を指している¹³⁾。

「逆境」は「貧困」(Poverty) を呼び寄せる。「貧困」はMagnificenceにすべてを失った今となっては、貧困に甘んじ、自分の意志を神の意志に合わせることによって再び逆境から救ってもらえるようにしろと命じる。かつての豪華な生活と、貧困にあえぐ現在のMagnificenceを比較する「貧困」の言葉に病への言及がある。かつては高級なりネンにくるまれていたMagnificenceの肌は 'scabbed, scurvy and lousy' になるのである。(2020行) これらはいずれも皮膚病を意味する用語である。

それでも Magnificence は物欲を捨てきれない。彼の惨めな姿を嘲る「法網やぶり」らに「何でも良いからくれ」と懇願する。悪徳たちが彼に与えるものは、歯痛であり、骨の痛みであり、痛風、咳、カタルである。(I bequeath him the tooth-ache. / ... the bone-ache. / ...gout ... / the murr, and the pose. 2253-60行) 不節制の結果得られるものは病だけであることを、悪徳たちは示しているのである。Magnificenceをさんざんなぶりものにした悪徳たちは売春宿へ繰りこもうとはしゃぐ。

治療法は悔悛と希望

「法網やぶり」らが Magnificence を置き去りにすると、続いて「絶望」(Despair) が、さらに「災厄」(Mischief) が彼を自殺に追い込もうとする。「絶望」から渡されたナイフで自殺しようとした Magnificence を押しとどめるのが「希望」(Good Hope) である。

「希望」の台詞からも Magnificence の没落を病と見なし、そこからの救いを治療のイメージで語っていることが読み取れる。道を誤ったものは「終わりなき病」(endless disease, 2343行) に陥るが、「希望を持つことにより治癒が行われる」(through good hope there may come remedy 2345行) のである。Magnificence も「希望」の言葉を「塗り薬」(nard 2346)「香油、鎮痛剤」「アラビアのガム(薬品として使用された)(balm / gum of Araby 2348行) ととらえるのである。しかし、患者を治すのは「希望」ではない。「神の恩寵こそ医者なのです」(2350行) と「希望」は論ず。Magnificence は神の咎により罰せられ、「希望」が薬剤師として神から任命されたのである。神の処罰は「苦いアロエという厳しい逆境」(bitter ales of hard adversity 2355行) をもって行われ、「希望」が「舐薬(口中で服用する練り薬)」(a lecturary soft 2356行) を処方することとなったのである。「ルバーブという悔恨を心に抱き、帰依という強心剤を食事のソースとし、霊的な香料を喜びの心に抱いて」神に感謝することが救いへと通じるのである。(With rhubarb of repentance in you for to rest; / With drams of devotion your diet must be dressed; / With gums ghostly of glad heart and mind 2358-69行) このようにして、「希望」の「患者(patient)」である Magnificence は健康を回復するのである。

意志と理性

Magnificence を「中庸」から遠ざけさせる為に「おためごかし」がいう台詞が「なにをなさろうとも、ご自分の意志(will)に従うのです」(1596行)である。will は reason と対比される機能である。人間だけが reason

を持ちうる生き物であり、reason を無視して will に従うということは、人間以下の動物的存在になることを意味する。理性あればこそ中庸という道を選べるのである。Magnificence は悪党どもの誘惑にのせられて過剰な肉欲と物欲を働かせてしまった。病への言及は過剰な飲食による弊害を示唆するものとなっている。今は改心した Magnificence へ告げる「償い」(Redress)の言葉が、中庸の重要性を確認する。「抑制できない過剰を改めるように決意するのです」(Determine to amend all your wanton excess 2410行)。「中庸を持って王国と国土を支配せぬ君主((For I strike lords of realms and lands / That rule not by measure 1939-40行)は「逆境」に撃たれることになるのである。

ジョン・ペイルの*King John* (1538年)

この作品はジョン王(1167?-1216)と教皇インノケンティウス三世(1161-1216)の争いを道徳劇と歴史劇のハイブリッドとも言うべき手法で劇化したものである¹⁴⁾。登場人物はジョン王以外はアレゴリーである。彼の破滅を企む「反乱」や「偽善」「不法権力」などのローマ・カトリック教会の手先となっている悪徳たちが、それまでは王に従っていた「聖職者」「貴族」そして「法秩序」という国家の三身分を離反させる。最後まで彼に従うのは凋落し実質的な力を持たない「英国」だけである。ジョン王の死後にプロテスタントに属する「真実」と「王威」という美德の寓意が登場して三身分を正しい道に引き戻し、悪徳たちを処罰する。ジョン王とインノケンティウスの争いは歴史的事実であるが、この作品のジョン王は、ペイルが自分の宗教観を正当化するための人物造形がなされている。

作品中で描かれるカトリック教会の王権を無視した横暴な振る舞いは、ヘンリー八世のもとで始まったイングランドにおける宗教改革を擁護するプロテスタントの急先鋒としてのベイルの立場からの描写である。作品の最後に登場して、イングランドの三身分に国王への忠誠を誓わせ、カトリックの悪徳たちを処罰する「王威」はヘンリー八世に擬せられる。また、最後の三身分のそれぞれの台詞からは、あたかもエリザベスがジョン王の事績を継いでカトリック勢力に対抗することを望んでいるかのようである。

窶れ果てた「イングランド」と 盲目の「平民」

ジョン王が統治するイングランドは疲弊し窶れ果てている。その原因はローマの支配下にいる聖職者たちの不当な振る舞いにある。「イングランド」はローマ教皇と聖職者たちを動物に例えて非難する。「ローマのイノシシ」(wyld bore of Rome 71行)であり、「豚」(pyggys 72および119行)であり、「邪悪なカトリックの豚」(vyle popych swine 107行)である彼らは「イングランド」の夫である神を追放してしまったのである。

寓意的な「イングランド」がこのような状態になってしまったのは、国家という身体を支えるべき3つの身分、すなわち「聖職者」「貴族」そして「法秩序」がそれぞれの機能を的確に果たしていないからである。その原因がローマ教皇にあるというのがベイルのメッセージである。

三身分に離反されたジョン王に付き従うのは「イングランド」とその息子の「平民」だけである。しかし、「平民」は盲目で貧困に喘いでいる。これも聖職者たちが労働の利益で

私腹を肥やしているからである。「イングランド」は息子が盲目になってしまった経過を次のように述べる。

「彼が肉体的に盲目なのは、神の言葉という知識が欠けているために、魂が盲目なことの現れなのです。」(His owtward blyndnes ys but a syngnyficacy[on / Of blndnes in sowle for lacke of informacyon / In the word of God 1582-84行)

ここには中世以降、特にレプラに関して言われていた肉体の病と魂の関係が読み取れる。レプラは甚だしく外見を崩れさせる病である。キリスト教会は性的放埒などの不道徳な行いが原因で、魂の汚れが外面に現れているとすると強調したのであった¹⁵⁾。これと同一の発想が「平民」の盲目にある。神の言葉を知らないのは「平民」の罪ではない。ローマ教皇の支配下にある聖職者が正しい教えを遠ざけているのである。しかし、その結果「平民」の、すなわちイングランド国民の、魂は正しい状態ではなくなってしまうのである。あるいは、レプラの原因を不適切な食事に求める原因説もあった。神の言葉という不可欠の栄養（それがあって初めて物事が正しく見える）が欠けているために盲目に陥った受け取れることもできる。

そのようなイングランドに外敵の脅威が迫る。「私有財産」が扮する枢機卿パングルフスがイングランドのロラード派を制圧するためにフランス、スペイン、デンマーク、ノルウェイの各軍を展開してイングランドを包囲していると警告する¹⁶⁾。

ジョン王が決断を下すために退場すると、「反乱」がイングランドを征服したと吹聴する。「今や教皇の思いのままに、女もワインも財宝もたんまりといただく、キリストも福

音も踏みにじり、真の信仰など追放だ、美德もみんな排除する、バルベットと金とシルクで飾り立て...」（1686-90行）これらは、プロテスタントの社会改革者たち、例えばPhilip Stubbsなどが批判したイングランドにはびこる悪癖の数々である。この後再度登場するジョン王は、枢機卿に王冠をわたし、退位するのである。

好色とローマ教会

ジョン王は教皇の手下となって責務を果たそうとしない「聖職者」に、教皇が座る椅子はベストによって汚されていること、聖職者たちは色欲を満足させるために活動していると非難し（the pope syttyng in the chayer of pestoolens / Ye ronne, to remayne in yowre concupysens 350-51行）、「貴族」たちが色欲の罪にまみれていることを警告する。（I rew yt in hart that you, Nobelyte, / Shuld thus bynd yowre selfe to the grett captyvyte / Of bloody Babulon the grownd and mother of whordom - / The romych Church I meane, more vyle than ever was Sodom 367-70行）ここでベストだけでなく好色に言及することにプロテスタント的観点が読み取れる。「売春の生みの親である血まみれのバビロン」は『ヨハネの黙示録』17-19章に登場する「大淫婦」を指している。『黙示録』の記述によればこの女の額には「大バビロン、みだらな女たちや、地上の忌まわしい者たちの母」という名が記され、「聖なる者たちの血と、イエスの証人たちの血に酔いしれて」いるのである。そしてそのバビロンを、ジョン王はローマ教会であると断言する。カトリック教会も性的放埒については厳しい批判を繰り返してきたが、プロテスタントによる売春批判はさらに厳格

なものとなっていた¹⁷⁾。『ジョン王』には梅毒に関する直接的な言及はないが、売春-梅毒-ローマ教会を結びつけるペイルの意図は明確である。

イングランドの教会をローマが汚染したことについては、「反乱」の証言がある。かつては聖アウグスティヌス、聖アンブローズ、聖ヒエロニモ、そして聖グレゴリーがキリスト教会の礎として存在していた。しかし、現在のイングランド教会に彼らは存在せず、かわりに「反乱」「不法権力」「私有財産」「偽善」がいるのである。その中でも「私有財産」が教会をあらゆる悪習によって汚染し、教会を罪深いセクトにかえてしまったのである。（Here is Privat welthe which hath the Chyrche infecte / With all abusyons and brought yt to a synfull secte 813-14行）

感染源はローマ

教皇権と王権の優位性を巡るジョン王と悪徳たちの論争が始まる。1361行から77行までの枢機卿パンドルフスに扮した「私有財産」の台詞には国家という身体を蝕む病理が読み取れる。ここで「私有財産」はイングランド全土を聖務禁止にすると脅迫する。有力な聖職者にローマ教皇の権威を与え、禁止令を全土に広めるというのである。イングランドだけではなく、全キリスト教国にまでジョン王に対する攻撃を加えさせようとする。貴族たちにもジョン王を暴君として敵対するように命じる。ローマを発生源とする感染が、ヨーロッパ全土に広がり、やがてイングランドを押包んでいく様が想起されるだろう。この脅迫に呼応するように「反乱」が舞台の袖であたかも外敵の襲来を思わせる擬音を発し、「警報、警報」と叫ぶ。ローマからの感染がつい

にイングランドに侵入してきたのである。

教皇の優位性を肯んぜず、「私有財産」を反キリストと断罪するジョン王に対して、「私有財産」は彼を破門すると脅迫する。三身分の助力を求めるジョン王に対して「法秩序」は王が「汚れている」と突き放す。(ye are a man defylyd 1423行) 三身分の離反に対してジョン王は、「お前たちは(わたしを)汚れているというが、お前たちこそペストのような教義によって墮落している」と反駁する (Ye speke of defylyng, but ye are corrupted all / With pestylent doctryne 1458-59行)。ここで用いられている defile は、OEDの定義では 'To render morally foul or polluted; to destroy the ideal purity of; to corrupt, taint, sully' に該当する、道徳的腐敗を包含する意味合いがある。既に言及した350行での教皇が座るペストの椅子も同様である。ローマからやってきてイングランドを汚染するカトリックの道徳的腐敗を象徴しているのである。

さらに、ジョン王の死後悪徳たちを罰するために登場する「王威」(上記のように、ローマ・カトリックと決別し、英国国教会を創設しその首長の座についたヘンリー八世を彷彿とさせる) が言及する再洗礼派批判にもペストのイメージが使われている。「再洗礼派は最近新たに生まれたセクトで、巧みなアレゴリーを用いて聖書を汚し...ここ(イングランド)でもペストの種を撒き始めているのだ」(The Anabaptystes, a secte newe rysen of late, / The scriptures poyseneth with their subtle allegories, / ... / They have here begonne their pestilent sedes to sowe 2626-2630行)。「王威」の言葉によって改悛した「法秩序」は「反乱」の「ペストのように汚れたやり方」(their pestylent wayes, 2669行)を

知り、警戒を怠らないようにしなければならないと自戒するのである。

再洗礼派への批判

「王威」によってイングランドの悪徳は一掃された。しかし、「反乱」などが撒いた種は完全に死滅したのではない。カトリック勢力や異端のセクトは活動を続けている。上記の「法秩序」の警戒の言葉を受けて、「貴族」はイングランドに新しく誕生した女王によってそれが成し遂げられるという。ここで歴史上のジョン王の物語は、エリザベスの時代へと転換する。エリザベスの即位によって、これまでカトリックのもたらしてきた悪徳が撲滅されるという期待をプロテスタントは抱いたのである。過去におけるローマ・カトリックによる王権を無視した無法な振る舞いが、宗教改革が進行中の時代へと重なっていくのである。ヘンリー八世が強行したローマとの決別は、エドワード六世に引き継がれたが、彼を継いだメアリーはカトリックを信奉し、多くの反対を押し切ってスペインとの関係を強化した。メアリーの統治下での厳しい弾圧を経験したプロテスタントはエリザベスによって再びプロテスタントへの回帰がなされることを期待したのである。実際にはエリザベスは巧みな手腕でそのどちらにも一方的な加担をせず、1559年の首長令と礼拝統一令、さらには1562年に39箇条の信仰箇条を制定し、英国国教会の信仰を確立するのであるが。

再洗礼派への言及は「反乱」によって2532行でも行われている¹⁸⁾。さらに、2680-81行では改悛した「聖職者」が再度このセクトについて触れ、「彼女(エリザベス)がペストのようなやり方をする再洗礼派を抑圧しようとしている」(the secte of Anabaptistes / She

seketh to suppress for their pestiferous
facyon 2681-82行）と期待の言葉を述べてい
る。ペストという概念は、ローマ・カトリッ
クのみならず、プロテスタントの中でも異端
と見られるセクトに対する批判の言葉として
用いられていたのである。

おわりに

*Magnificence*も*King John*も、タイトル
ロールの国王の生き方が国家の存亡そのもの
と同化している。*Magnificence*の作者は、宮
廷にはびこる悪徳が国王の理性（肉体を支配
する）の隙について意志（肉体に従属する）
に訴え、欲望に負けた国王が中庸を忘れて悪
徳（肉欲と貪欲）にのめりこむ危険性を警告
している。病は作品のメッセージを強化する
メタファーとして機能していると言えるだろ
う。一方、*King John*においては病はローマ
教皇を発生源とする、宗教的腐敗の結果であ
る。教皇とペストを結び付ける作者の描写は、
病を攻撃のための武器として使用しているこ
とをうかがわせる。

二人の作者はどちらもカトリックを糾弾し
た。彼らが生きていた時代にペストは繰り返
しイングランドを襲い、梅毒も猛威をふるっ
ていた。Healeyは梅毒に関する章の中で、プ
ロテスタントの劇作家たちが、性的放埒の結
果と考えられていたこの病を舞台上で観客に
想起させることによって、快楽の追求に対す
る警告とする手法を用いていたことを述べて
いる。(Healey 144) 癩病は15世紀頃にはほ
ぼ消滅したといわれている。しかし再洗礼派
など異端とみなされるセクト攻撃にみられる
ように、思想的汚染を表すメタファーとして
利用され続けていた。

*Magnificence*も*King John*も、貴族の館に

おける身分の高い観客を想定している¹⁹⁾。国
王の身体と国家の身体という関連性について
は十分に認識していたであろう。彼らはアレ
ゴリカルな登場人物の肉体を冒す病という奇
妙な現象を、個々の肉体を損なう病理として
よりも、国家を蝕む悪徳やセクトに対する批
判を受け取っていたのである。

ベイルの*King John*は後のシェイクスピア
などのエリザベス朝歴史劇につながる作品
として評価が定まっている。ベイルの行った
ことは、歴史上のジョン王をプロテスタント
的プロパガンダの観点から再評価したものと言
えるだろう²⁰⁾。イングランド国内の宗教的
状況、長く続くフランスとの敵対関係、スペ
インが代表するカトリック教国からの圧力な
ど、イングランドは内外に解決が難しい問題
を抱えていた。ベイルはローマ教皇を最大の
敵として設定し、教皇を悪と断定する。その
ために用いた武器が聖書の記述にその端を発
する「病」＝「悪」「神による処罰」という
論理であった。彼は病が思想的にも政治的
にも武器にもなりうることを証明しているの
である。

注

- 1) 「インターロードにおける寓意的「国王」の身
体について」『埼玉学園大学紀要第10号』（2010年
所収）
- 2) M. Healy, *Fictions of Disease in Early Modern
England*, Palgrave, 2001, pp.1-3
- 3) 黒死病とは特に中世ヨーロッパを襲ったペスト
の一種をさす便宜的な用語である。感染者の皮膚
が黒ずんできてくることからこの呼称が生まれたの
であるが、この症状から実際にはペストではなく
ウイルス性の出血熱であるとの報告もなされてい
る。http://www.shigamed.ac.jp/~hqanimal/

- zoonosis/zoonosis159.htmlを参照。
- 4) John Aberth, *From the Brink of the Apocalypse*, Routledge, 2010, 119-21
- 5) 聖書からの引用は新共同訳による。二カ所に「疫病」という言葉が使われているが、いわゆる欽定訳聖書(1611年)では 'pestilence' と 'any plague'、1599年の Geneva Bible ではどちらも 'plague' が使われ、ウィクリフ訳の聖書では 'plague' と 'scourge' となっている。'plague' という単語はペスト以外の病気一般をさす用法もあるため、(OED,2および3) 欽定訳の 'any plague' という表記は、これが必ずしもいわゆる黒死病に当たらない可能性を示唆している。
- 6) *Pestilence in Medieval and Early Modern English Literature*, Routledge, 2004, 48-49. Gower や Chaucer の作品や、*Amis and Amiloun* などの文学作品での癩病の扱いについては同書 79-102ページを参照。中世においては癩病がセックスと結びついた病であると考えられていたとする従来の説に Grigsby は疑問を投げかけている。
- 7) クロード・ケテル著、寺田光徳訳『梅毒の歴史』藤原書店、1996年、11ページおよび396ページ。
- 8) R. Totaro, *The Plague in Print*, Duquesne U.P., 2010, 1-16.
- 9) *The English Experience*, Number 527, Theatrm Orbis Terrarum Ltd., Amsterdam, 1973. S.T.C. No. 13240.
- 10) この団体は現在でも The Royal College of Physicians として活動を続けている。http://www.rcplondon.ac.uk。Francis Hering の記録も保存されており、生年は不明であるが、ケンブリッジ大学から医学博士号を授かっている。
- 11) 使用したテキストは Paula Neus, ed. *Magnificence*, Manchester U.P., 1980. 作品のあらすじや歴史的文脈については『イギリス中世・チューダー朝事典』松田編、慶応義塾大学出版会、1998年、193-95ページを参照。作者のスケルトンについては、同書135-36ページを参照。
- 12) *Magnificence* に登場する悪徳は、それぞれがヘンリー八世の腹心であったウルジーの一面を表しているという R.L.Ramsay の解釈がある。
- (*Magnificence*, EETS ES98 (1908), p.cx.) それに対する批判は Greg Walker, *Plays of Persuasion*, pp.61-65を参照。本稿ではウルジー説に関する考察は行わないが、ウルジーの反フランス的政策が悪徳たちの描写に垣間見られることを指摘しておく。Fancy が持参した手紙がフランスの Pontesse からイングランドに送られたこと、さらに350行以降の体験談中に見られる Fancy が Friar Tuck のように禿頭にされそうになったり、「印を付ける」ことを強要されたことなどは、海外からの疫病の伝播を警戒していたイングランドのフランスに対する警戒心を表しているのかもしれないと考えている。ただしこれはうがち過ぎかもしれない。
- 13) OEDの定義では、3. A general name for any malignant diseases with which men or beasts are stricken.に該当する。
- 14) 使用するテキストは *The Complete Plays of John Bale*, vol. I, ed. by Peter Happe, D.S.Brewer, 1985. 作品のあらすじや歴史的文脈については『イギリス中世・チューダー朝演劇事典』228-233ページを、作者については139-40ページを参照。
- 15) Carole Rawcliffe, *Leprosy in Medieval England*, The Boydell Press, 2006, 44-55. B.L.Grigsby, 35ページを参照。
- 16) Catholic Encyclopedia によると、この枢機卿は史実でも教皇インノケンティウスからジョン王への特使として派遣され、フランス軍によるイングランド侵攻による圧力を加えている。http://www.newadvent.org/cathen/11441a.htmを参照。
- 17) ルターやカルバンの性の問題に関する解説は『売春の歴史』第8章「宗教改革と梅毒」を参照。
- 18) テキストの編者である Happeは、作者のペイルが悪徳であるカトリックに属する「反乱」にも再洗礼派を批判させていることに注目している。139ページ。
- 19) Neuss, 42-43,およびHappe,22-23.
- 20) D.N.Mager, 'John Bale and Early Tudor Sodomy Discourse,' in *Queering the Renaissance*, J. Goldberg ed., 1994, Duke U.P.